

## 中国古代の占夢 (三)

今 場 正 美

### (一) 占夢の理論

占夢家たちは占夢の方法については口を閉ざして語ろうとしない。それによって、占夢の神秘性が保たれ高められるが、必要に応じて随意にこじつけることも可能である。しかし、他人の夢を占う際には、あれこれと自分の占夢の方法を披露せざるをえない。古代の文献に歴代の占夢家の占夢法に関する記録がないけれども、夥しい夢占いの例が残されているので、具体的な夢占いの実例の中からその方法を見いだすことができる。もちろん、古代の占夢は複雑で多岐にわたるが、現代の理論によって、明確なてがかりを帰納することができる。

既述のように、占夢法の背景には神秘的な夢魂の觀念が存在する。夢を分析することで、そこに含まれる神意(すなわち、神霊や鬼魂の意向)が示され、それがどんな未来を予兆するか説かれる(吉凶および未来の出来事)。その結果、時が経ち現実化することによって、「占驗むなしからず」予兆が正しいことが証明されるのである。このように、占夢の鍵は、夢兆が人事と関連づけられ、夢と現実とが一致することにある。けれども、実際は夢と未来の出来事とは、完全に一致するこ

ともあれば、全く一致しないことも多く、全く反対のこともある。論理的にいえば三つの情況が考えられる。一つ目は、同一の関係、二つ目は異なる関係、三つ目は相反する関係である。それに応じて、歴史上にはとても変った各種の占夢法がある。それらは三種類に分けられ、一は「直解」、二は「転釈」、三は「反説」である。堅固な理論が打ち立てられると、どんな占夢家もその構造を脱け出すことはできず、その枠の中で自分の器量と技の冴えを見せることができるだけである。

### (1) 直解

直解は最も簡単な占夢法である。それは夢を予兆と直接結びつけて解釈する方法である。どんな夢でもそれぞれ人事と関わりがあり、夢と予兆とが形式の上でも内容的にも同一の関係にある。同一の関係にあるが故に、夢解きはいともたやすく、特殊な情況を除けば、夢を見た者が自分で占うことも可能である。知識や経験が足りないために自分で占うことができないこともあるが、一たび占夢家からヒントを与えられるや、すぐに了解することができる。

例えば、殷の高宗は傳説を夢に見て、すぐに傳説を見つけ出した。

夢の中では傳説の名は知らなかったが、傳説の顔を見分けることができた。夢の中で上帝がかれにこの人物を授けたのだから、きっとこの人を見つかるだろうと思つたのは、直解によって自分で夢を占つたのである。また、武王は三神がかれに、きつと殷の紂王を討伐するだろうと告げる夢を見た。このような夢を見て、武王はこれは三神が自分に下した命令と思ひ、その夢のとおりに出兵して紂を討つたのである。

これも直解によつて占つた例である。けれども、中には神の奇怪な姿や変化のさまが現れた夢もあり、直解できたとしても、夢を見た者が自分で占えるとは限らない。例えば、虢公は廟の中に神がいる夢を見た。それは「人面で、白い毛、虎の爪」をして西の壁の下に立っていたが、何の神か分からなかった。史嚳は、もしそうならそれは「天の刑神」たる蓐収であると解釈した<sup>[1]</sup>。さらに、晋侯は寢室に入つてくる一頭の黄色い熊におびえる夢を見た。子産がその夢を解き、黄色の熊は鯀で、「昔堯が鯀を羽山に殛し、其の神化して黄熊と為る」と言つた<sup>[2]</sup>。

直解法は最も簡易で、占夢の歴史に最も早く現れた。原始の時代から、夢は実在するもので、覚醒時に知覚したものと同様に実在すると考えられた。だから、「本能的に」夢を直解する習慣があつたのである。チェロキー人は蛇に咬まれる夢を見たら、本当に蛇に咬まれた時のように治療をする。北アメリカのインディアンは戦争で捕虜になる夢を見たら、友だちに捕虜のように扱ひ、縛り上げて自由にのしるよう求める。もし自分の家が燃える夢を見たら、本当に自分の家が燃えるのを見ないと安心できない<sup>[1]</sup>。おそらくそうした考え方の影響であろう、世界各地の原始人にそのような習慣が広く見られ、夜にあ

る夢を見ると、近い将来に必ずそれが現実となると考えている。今でも我が国の後進民族、あるいは漢族でも辺鄙な農村の人々が、依然として無意識にいつもこのように夢をとらえているのを目にする。

占夢の理論上、「直解」が占ひの重要な方法であるのは、「直夢」に相当する夢も存在するからだ。「直夢」の特徴が「直協」、「直応」することから、「直解」の方法が取られるのである。

後漢の王充は偉大な無神論者で、占夢を迷信であると批判し、「直夢」は確かに存在するが、しかし「直応」は偶然の一致にすぎないと説いた。例えば、夜に甲を夢に見て、君を夢に見た人が、翌日、甲に会い、君に会つたら、「直応」といってよい。しかし、甲に問い、君に問うても、かれらは夜に夢を見た本人を夢に見てはいないと言う。よつて、こうした夢の例から、夢は鬼神によつて起こるものではなく、占夢が必ず的中するとは限らないことを証明している<sup>[3]</sup>。

後漢の王符は決して神秘主義者ではないが、占夢に対しては不可解な考え方が散見する。「直夢」については、極めてまじめに「占驗虚しからず」の有力な証拠と見なしている。「先に夢みる所有れば、後に差忒なし、之を直と謂ふ」と述べ、夢の例を挙げて証明している。

武王の邑姜、方に大叔を震するに当り、夢に帝、己に謂ふ、「余、而の子に命づけて虞と曰はん。將に之に唐を与へん」と。生るるに及んで、手に文ありて、「虞」と曰ふ。因りて以て名と為す。成王の唐を滅すに及んで、遂に以て之を封ぜり。此れ直夢を謂ふなり。(本書附録一『潜夫論・夢列』新校)

この夢の記事は一目して、「直応」の例であることが分かる。上帝が

夢の中ではっきりと告げ、それが後に掌の「虞」という模様となって証明される。「直解」は至極当然の方法のようだ。しかし、実際には、こうした「直解」はこじつけ以外の何物でもない。王符より前、王充の指摘によれば、こうした現象は「性の自然」にすぎず、神意とは何の関係もない<sup>2)</sup>。

唐の孔穎達はさらに考証を進め、「隸書は秦末に起る。手文(紋)は必ず隸書に非ず。『石經』の古文は「虞」を「攸」に作る。手文(紋)の容は或は之に似る」と言っている<sup>3)</sup>。よって、手紋を上帝が彫った字と考えることは到底できない。夢中の上帝のことばも疑わしい。

明の陳士元は完全なる神秘主義者である。かれは「直夢」を「直叶」と称している。「叶」とは協であり、合である。事実と夢とが一致し、夢に見たことがそのまま現実のこととなる、こうした夢は「直解」によって占うべきである。

何をか直叶と謂はん。君を夢みれば則ち君を見、甲を夢みれば則ち甲を見、鹿を夢みれば則ち鹿を見、粟を夢みれば則ち粟を見、刺客を夢みれば則ち刺客を見、秋駕を受くるを夢みれば則ち秋駕を受く。此れ直叶の夢、其の類は推すべきなり。(『夢占逸旨』感夢篇)

君を夢み甲を夢みるの例は『論衡』にもとづく。しかし、王充はこれを「直応」と見なしたわけではない。鹿を夢みる例は『列子』に、粟を夢みる例は『晋書』に、刺客を夢みる例は『五代史』に、秋駕を受くるを夢みる例は『呂氏春秋』に、それぞれもとづいている。これらの例は所謂「応驗」、夢が現実となったものだが、それらは捏造、偶然の一致、願望や予感の現実化などである。『晋書』劉浩伝によれば、

劉浩は祖母に孝行を尽くしていたが、貧乏で食に欠くほどだった。ある夜、夢にある人が現れ言った、西の垣根の下に食べ物があると。覚めた後、その食べ物を得たが、その傍らに字が記されていた。それは、「七年粟百石、以て孝子の劉浩に賜はらん」というものだった。この夢と現実の出来事も全く信じることができない。『呂氏春秋』道応篇によれば、ある人が駕馭の術を学んで三年たったが何も伝授されず、寝ても覚めてもこのことで悩んでいた。ある日、「中夜に秋駕を師より受くるを夢み」、翌朝、師に呼ばれて「秋駕」を伝授された。これはありうることであるが、鬼神とは何の関係もない。

夢占いの中では、「直解」は最も簡単で、専門的知識が何もいらないうちに見える。しかし、占夢家にとって、実際には大きなタブーとなっている。十分な理解もないのに軽率に用いることは、かたく禁じられている。夢と現実とが完全に「直合」したり「直応」したりすることはごく稀なことだからである。もし軽率に「直解」を用いたならば、夢解きと異なる事実となり(「占ひて驗ぜず」、取り返しがつかなくなってしまう。そんなことにでもなれば、占夢者は威信がすっかりなくなるばかりか、飯の種までなくしてしまうだろう。現存する各種の夢書の残巻や佚文などを調べた限りでは、「直解」によつて夢解きをした例はほんのわずかであるが、それはおそらくそうした理由によるものだろう。歴代の占夢家が最も好んで用いたのは、「転釈」という方法である。種類や方法が最も多いのも「転釈」の特徴である。

## (2) 転釈

「転釈」は「直解」とは異なり、直接に夢を解釈して現実の出来事

を予兆するものではない。それはまず夢をきまった形式によって転換し、それから転換された夢をもとにさらに解釈を加えて予兆するものである。このように、夢がきまった形式による転換という過程をとることで、占夢家に融通をはたらかせる余地をあたえ、占夢家は必要に応じて自由にこじつけることができるようになった。また、夢と現実とは表面上は一致しないが、実質的には一致しているというような言い方を、占夢家に許すことにもなった。表面的には一致しないが、特殊な技量をそなえた方術の士にたのめば、夢の奥に潜む鬼神の意向を示してもらえるのだ。真相が分からない人からすれば、占夢家の夢解きは実に摩訶不思議なものといえる。

「転釈」の具体的な方法は数多く、主なものとして、象徴法、連類法、類比法、解読法、解字法、諧音法などがある。

### 1 象徴法

象徴法は夢をまずそれが象徴するものに転換した上で、それをもとに夢の意味や現実の出来事について説明する方法である。占夢の理論でいえば、「象夢」、あるいは「象兆の夢」に相当する。これらはともに象徴法によって占う。『潜夫論』夢列篇に、

詩に曰く、「維れ熊維れ熊は、男子の祥なり。維れ虺維れ蛇は、女子の祥なり」、「衆と維れ魚とは、実に維れ豊年なり。旒と維れ旗とは、室家溱溱たり」と。此れ象夢を謂ふなり。(本書附録一『潜夫論・夢列』新校)

熊虺虺蛇の夢は『小雅』斯干にもとづく。鄭玄の箋によれば、「熊虺は山に在り、陽の祥なり」、よって、熊や虺の夢は男子を生む象徴と

なる。また、箋に「虺蛇は穴処す、陰の祥なり」とあり、虺や蛇の夢は女子を生む象徴となる。確かに、気質的にいって、熊や虺には剛陽の性がそなわり、虺や蛇には陰柔の徳がそなわっている。それらを區別して男女の象徴としたことは、中華民族が長期にわたって形成してきた社会心理の反映である。その大本をたどるならば、先史時代のトテム信仰や族外婚と関係があらう。魚旛旗の夢は『小雅』無羊にもとづく。原始の人々は初め漁撈や狩猟をして生活していた。そうした生活が長く続くうち、かれらは多くの魚を夢に見たら豊漁のしるしとする心理がはたらくようになったのである。原始の人々にはまたトテムの觀念があるので、長寿で多産の亀や蛇の旗を夢に見たら、それを人口が多く増えるしるしと考えるのは自然なことである。占夢官によるこうした転換と解釈は、まさに上述の民族の伝統的な習慣や心理を利用したものといえよう。

象徴性のある夢は熊虺虺蛇などに限らず、その範囲はあらゆるものにわたる。地上の植物、動物、山陵、楼台など、天上の日月星辰、風雷雨電など、そのほか、生活上の器物や衣食、さらには人体の器官に及ぶまで、すべて夢の中では象徴的な意味を帯び、その象徴するものによって夢の意味や現実の出来事を説明することができる。あるものが夢の中でどんな象徴の意味をもつか、占夢家も占夢書もふつうは関与せずに、神意によるものと答える。そこに各民族の古い宗教觀念、風俗習慣、社会心理をうかがうことができる。

象徴法による夢や占夢の例は多い。植物の夢について、漢や唐の時代の夢書の佚文には、

松は人君たり。夢に松を見る者は、人君の徴を見るなり。

楡は人君たり、徳は至仁なり。楡の葉を采るを夢みるは、恩賜を受くるなり。樹上に居るを夢みるは、貴官を得るなり。其の葉の滋茂するを夢みるは、福祿の存するなり。

桃は守御たり、不祥を辟くるなり。夢に桃を見る者は、守御の官なり。

柳は使者たり。夢に柳を見る者は、当に出游すべきなり。

竹は処士の田居たり。夢に竹を見る者は、猶ほ処士のごときなり。

(本書附録二、草木類49—54)

と記される。松、楡、桃、李、柳、竹などの植物は、夢の中ではそれぞれ異なった象徴的意味をもつ。松は貴重な高木で、幹が太く高く伸び、青々として長寿を保つ。昔から宗廟や宮殿を建てる時には、きまって松を棟木とした。『白虎通』宗廟篇に、「松は自ら竦動する所以なり」とあり、『字説』には、「松は百木の長たり」とある。おそらく、松が樹木の王であることから、夢の中では人君の象徴とされたのである。楡は古代では神秘的な存在であった。『古楽府』に、「天上何の有る所ぞ、歴歴として白楡を生ず」とある。楡は神樹で、楡の火は「天

火」と呼ばれる。それはおそらく、「楡」と「御」とが同音であるため、楡は夢の中では人君の象徴とされたのであろう。李の樹の「李」は古く「理」と音通する。「李」はまた裁判官の名で、「司李」と呼ばれた。

『管子』法法篇に、「臯陶は李たり」とある。臯陶は中国の歴史上、最初の裁判官である。『管子』大匡篇に、「国子をして李を為さしめ」とあり、注に、「獄官(の名)なり」とある。李の樹は夢の中では裁判

官の象徴とされたのである。桃は古代の風俗において、邪を辟け鬼を

驅る効能があるとされた。『周礼』(夏官)戎右の鄭玄注に、「桃は、鬼の畏るる所なり」とある。『左伝』昭公四年に、「桃弧棘矢」が災いを除くことができるという記載がある。『後漢書』礼儀志には、門に桃印(桃の木に文字を彫刻した辟邪の飾り物・詠者注)を置くと邪鬼が門内に入るのを防ぐという。それで桃は夢の中では守御の官の象徴とされたのである。「柳は使者たり」という考え方はずいぶん歴史が長い。友人や家族が旅立つ時には、見送る者は柳を折って相手に贈る。けれども、その由来については、知らない者が多い。古くはよく柳の樹で車を作った。後には「車」を「柳」と呼んだ。服虔は、「東郡は広轍車を謂ひて柳と為す」といい、李奇は、「大牛車を柳と為す」という。高貴な人が旅をする時には必ず車に乗ったから、それで柳は夢の中では旅の象徴とされたのである。「竹は処士たり」とは、おそらく、魏晋の「竹林の七賢」の後に生まれた考え方であろう。

動物の夢について、漢や唐の時代の夢書の佚文には、

鶏は武吏たり、冠距有ればなり。夢に雄鶏を見るは、猶ほ武吏のごときなり。

伯勞は「口舌」たり、声悪むべければなり。夢に伯勞を見るは、猶ほ口舌のごときなり。

夢に鳩鵲を見るは、猶ほ双せざるなり。婦夢に之を見る、此れ独居なり。婿(夢に)之を見る、恐らくは妻を失ふなり。(本書附録二、虫鳥類第59、60、57)

雄鶏の戦闘好きは周知のことである。雄鶏のときかは戦士のしるしの

ようである。こうした習性により、鶏は夢の中では武吏の象徴とされたのである。占夢家によれば、雄鶏の夢を見たら、武吏が面倒なことを引き起こす。伯勞は鳥の名で、とてもひどい鳴き声で、人は皆いやがる。それで、伯勞は夢の中ではいさかいの象徴とされたのである。ある夜に伯勞の夢を見たら、翌日には誰かと言い争う。鳩鵠は雌雄一対の水鳥の名である。『唐韻』に引く陸佃の語に、「長目にして精交す、故に鳩鵠と名づく」とある。『師曠禽經』にも、「精交して孕む」とある。「精交」とは、ともにいるときに自然と秋波を送ることをいうが、いっしょに暮らしているわけではない。それで「居して双せざるなり」というのである。こうした習性により、鳩鵠はまた夫婦関係の象徴とされている。もし、妻がその夢を見たら、寡婦となる予兆、夫が見たら、鰥夫となる予兆とされた。

『夢占逸旨』(鳳鳥篇)にはまた、「鳳鳥は、仁鳥なり。(中略)鶴鳧は仙鳥たり、鷹隼は義鳥たり、鳥は孝鳥たり、雉は介鳥たり、孔雀は文鳥たり、鴻雁は賓鳥たり、鵠は喜鳥たり、雉鳩、鶴鵠は別有り序有るの鳥たり、鴟鵂は妖鳥たり」とある。これらの鳥は夢の中ではそれぞれに象徴的な意味をもつ。虫や蛇、あるいは獣の中で、『詩經』の熊羆虺蛇の夢のほか、昔から龍が帝王の象徴とされている。『新書』容経篇に、「龍なる者は、人君の辟なり」とある。『風俗通』に、「龍なる者は陽の類、君子の象なり」とある。<sup>5)</sup>占夢家によれば、龍の夢を見た者は、必ず天子を生むか、あるいは必ず天子となるかのどちらかである。正史にはこうした伝説が数多く記されているため、占夢家も得々として語る事ができるのである。

天象の夢は、最も典型的なものに、日月の夢がある。日は帝王の象徴で、日を夢に見たら男が生まれて天子となり、月を夢に見たら女が生まれて后妃となる。『夢占逸旨』(日月篇)に、

日月は、極貴の徴なり。昔、漢武帝の母に、神女の日を授くる夢有り。而して宋の太宗、真宗、仁宗、寧宗、其の母の娠して育するや、蓋し日を夢みざるなきのみ。(中略)乃ち月のごときは、衆陰の長たり、亦上天の使なり。(中略)漢の元后の生まると、夫の斉婁后の女を生むと、皆月を懐くの夢有りて、果して妃后の尊に応ず。

とあるが、しかし、太陽の夢は本来帝王の象徴ではなかった。おそらくこの世に帝王が生まれる前に、夢の中に太陽が現れたことだろう。チンポー族やヤオ族などの少数民族の風俗では、太陽は老人の象徴で、例えば、日没の夢を見たら、家や村の老人が死ぬとされていた。『拾遺記』(巻一)に、帝嚳の妃の鄒屠氏が太陽を呑みこむ夢を見て、男児を生み、そうやって八人の子を生んだという伝説が載せられている。このように夢中の太陽は男子の象徴にすぎない。『新序』刺客篇には、「吾の天下を有つは、天に日有るが如し」という夏の桀王のことがばを載せるが、それは地上の帝王が天上の太陽を自己の象徴として以来、人々が初めて夢に現れた太陽を帝王の象徴と考えるようになったとすべきである。『戦国策』趙策に、「吾聞く、夢に人君を見る者は夢に日を見る」という衛霊公のことがばを載せるが、おそらくこうした考え方は春秋時代以後に初めて後代に伝わったのだろう。だから、太陽が懐に入るといふ王夫人の夢を、太子が「此れ貴徴なり」としたのだ。<sup>5)</sup>『王

纂』はこれを敷衍し、「王夫人、神女の日を捧げて以て己に授け之を呑むを夢みて、遂に孕み、(漢)武帝を生む」と記す<sup>6</sup>。夢中の月を后妃の象徴とする考えは、おそらく夢の中の太陽を帝王の象徴としたのと同時期かそれよりやや後に生まれたものであろう。文献的には、漢代になって初めてそうした記述が見られる。『漢書』外戚伝に、元后の母が元后を孕んでいた時、「月の懐に入るを夢」みたという記事がある。『北齊書』神武妻后伝にも、神武妻后が二人の娘を生んだ時、月が懐に入る夢を見たが、その後二人が皇后になったという記事を載せる。史書に見えるこの種の記事には、大抵、事後の脚色がほどこざれているので、それをそのまま事実として信用することはできない。日月の夢はこの世に数多くあるが、その子が皆帝王や后妃になったわけではない。

また、『論衡』紀妖篇に、「楼台山陵は、官位の象なり。人、楼台上り、山陵に昇るを夢みれば、輒ち官位を得」とある。また、『白孔六帖』に引く『夢書』に、「桀は黒風の其の宮を破るを夢み、紂は大雷の其の首を撃つを夢みる」とある。黒風と大雷にはともに象徴的な意味がある。文士にとって筆墨は必需品で、美しい文章は花や錦に喩えられる。したがって、夢の中の筆墨、花、錦はふつう文才の象徴とされる。馬融が錦のような花を夢に見、王珣が椽のような筆を夢に見、李白が筆に花が咲く夢を見、王勃が袖に墨丸の満ちる夢を見たという伝説がある<sup>7</sup>。後に、占夢家がこれらの伝説にもとづき、類似の夢について占ったのである。

象徴法によって夢の内容を転写するのは比較的簡単であるが、時に

相当に複雑な場合もある。『左伝』成公十六年に、

呂錡夢に月を射て之<sup>あ</sup>にて、退きて泥に入る。之を占ひて曰く、「姫姓は日なり。異姓は月なり。必ず楚王なり。射て之を中て、退きて泥に入るは、亦必ず死なん」と。

という記載がある。呂錡は晋の魏錡である。夢中の日月は一般的な意味を離れ、尊卑や内外を象徴している。日は姫姓を象徴し、尊く、内を為す。月は異姓を象徴し、卑しく、外を為す。占者は当時の情況から判断し、それぞれ転写して晋国と楚国とした。だから、夢の中で「月を射て之を中て」たのは、楚王を射て命中させる予兆である。「退きて泥に入る」は、転写して死亡の象徴とした。杜預の注に、「錡自ら泥に入るは、亦死の象なり」とある。「泥に入る」は「土に入る」で、占者は呂錡が終には「亦必ず死なん」と見なしたのである。

『左伝』哀公二十六年には、宋の景公の死後、得<sup>と</sup>と啓が君位を争う記事がある。得はずばらしい夢を見たので、きつと君王となるだろうと思った。

得夢に啓北首して盧門の外に寝ね、己は烏と為りて其の上に乗まり、殊南門に加はり、尾桐門に加はる。曰く、「余の夢は美なり、必ず立たん」と。

盧門は、宋の東城の南門を指し、桐門は北門を指す。殊は、烏のくちばしである。夢の中の門内と門外とはそれぞれ国を得ると国を失うとを象徴し、南向と北首とはそれぞれ生存と死亡とを象徴する。杜預の注に、啓の「北首するは、死の象なり、門外に在るは、国を失うなり」とある。疏に(『礼記』礼運篇を引いて「死者は北首し、生者は南向

す。故に北首を以て死の象と為す」とあるのは、春秋時代に流行した考え方である。鳥の口ばしが南門に、尾が北門にあり、からだは「南向き」というのは「生者」の象で、全身が門の中にあるのは、「国を得る」象徴である。「鳥」の姿で現れたことについて、言及する者が無いが、これは「鳥」と「吾」とが同音であるからだろう。「鳥」が啓のからだに止まるのは、まさしく「吾」なる得が啓に勝つという象徴ではないか。

さらに付け加えるべきは、各民族にはそれぞれ歴史、宗教、風俗習慣、社会心理などの違いにより、夢の象徴的な意味にもきわだった民族性が現れていることである。したがって、同じ内容の夢でも民族によってその解釈が異なることは往々にして起こる。例えば、チンポー族はカポチャやキュウリをかごに背負って帰る夢を見たら災難の象徴だとするが、これは他の民族には見られない。また、ヤオ族は樹木、蛇、石を富の象徴とし、樹を切ったり転がる石や走る蛇を夢に見たら、それは財を失う象徴とされる。ホジェン族は、長い衣服を着る夢を見たら、金持ちになる象徴と考える。同様に、女の人を夢に見たら、ホジェン族は万事順調の象徴とするが、ヤオ族は小さな災いの予兆と見なす。しかし、中国の各民族にはほぼ共通するのは、歯を老人や家族の象徴とし、歯が抜ける夢を見たら人が死ぬと信じていることだ。上の歯が抜けたら親の死、下の歯が抜けたら同世代か子どもの死。西洋の習俗にもよく似たものがある。

## 2 連類法

連類法はまず夢を他の関連する物に転化し、その後にもとづ

いて夢の意味や現実の出来事について説明するものである。この占いは人々の生活経験にもとづいた方法なので、比較的容易に受け入れられ理解される。ただ、しばしば生活との関係を絶対視したり普遍化する一方、背景にある歴史や条件を無視してしまう傾向があり、象徴法ほど効果的ではない。

連類法はおそらく有史以前に既に存在したと思われる。少数民族の風俗の中に、そうした占いの例を見ることができ。例えば、ホジェン族は、夜に酒を飲んだり、お金を得たりする夢を見たら、猟に出て必ず獲物を仕留めることができる、また、馬に乗って道を行く夢を見たら、猟に出ても獲物を得られずに帰ってくると信じている。これがすなわち狩猟生活にもとづくかれらの「連類」法である。猟に出て獲物を得てはじめてお金を稼ぐことができ、お金を手にしてはじめて酒を買って飲むことができる。猟に出て獲物を仕留められなければ、馬に乗せる物もなく、猟師は馬に乗って道を行ってしまうだろう。このように、ホジェン族は占夢の際に、酒を飲んだりお金を得ることと獲物を得ることを関連づけ、馬に乗って道を行くことと猟に出て獲物を得られないことを関連づけているのである。また、チンポー族は、妻子が鋌(きつきき)、槍、長刀などを夢に見たら必ず男児を生むとし、鉄鍋やかまどを夢に見たら必ず女兒を生むと信じている。それは、昔からチンポー族の男は刀剣で舞い、女はずっと家で食事の用意をしてきたからだ。

ところで、漢や唐の夢書の佚文には、連類法によって夢を占った例が多い。

夢に娥を見る者は、猶ほ婚するがごとし。

夢に竈を見る者は、猶ほ婦を求め女を嫁するがごとし。

夢に甌おうを見る〔者〕は、妻を娶らんと欲す。

夢に新銚しやうを見るものは、当に好婦を娶るべし。(本書附録二、第48、32、28、30)

娥は古代に青年男女が両肩につけた装飾物で、竈は女性が食事を作るかまど、甌と銚は炊事用具である。これらの器物はいつも女性とともにあるので、男性の夢に出てきたら、男性が「猶ほ婚するがごとし」、「妻を娶る」という心理と関係があるのは当然である。ただ、これらの物を夢に見ても必ず相手を得て妻にすることができるかどうかは定かではない。

囲碁を夢みる者は、鬪はんと欲するなり。

〔弓〕を持ち〔琴〕を弾くを夢みる者は、必ず朋友を得るなり。

夢に鞭策を得る者は、使有らんと欲するなり。

夢に杯案を見る者は、賓客到るなり。

夢に〔五〕穀を見るものは、財を得て吉なり。(本書附録二、第26、20、23、31、39)

囲碁をする者は、いつも勝負をしなければならない。囲碁をする夢は、夢を見た者の「鬪はんと欲する」心理の反映である。琴を弾く者は知音(友だち)を得たいと願っている。鞭策は騎乗に用いる道具で、杯案はふつう賓客のために用意する物、五穀はもともと財産である。占夢におけるこの連類法にも根拠がある。ただ、琴を弾く夢を見たから必ず友だちができ、杯案を夢に見たから必ず賓客が訪れ、五穀を夢に

見たから必ず財産を得ることができるか、それは保証の限りではない。

象徴法にせよ連類法にせよ、一般的な例もあれば、特殊な解釈もある。拙劣な占夢家は通例にしばらくはちで、占いははずれてしまう。優れた占夢家は臨機応変に対処し、うまくこじつける。太史芻狗を周宣が三度占ったのも、すべて連類法を用いている。ただ、最初の「美食を得んと欲す」、二度目の「車より墮ちて脚を折る」、三度目の「君の家失火す」は、同じ夢を占いながら、それぞれ違った占いの結果を出している。<sup>(8)</sup>そこに連類法の見せ場がある。

### 3 類比法

類比法は夢の特徴にもとづき、比喻によって夢の意味を解釈するもので、類推によって人事を説明する。この占いのキーポイントは、夢のどんな特徴をとらえ、いかに類推をはたらかせるかという点にある。象徴法や連類法に比べ、類比法は占夢家の夢解釈に一層の融通性を加え、それによつて的中率を上げることができる。ただ、夢を見た者はいつも狐につままれたような不思議な気持ちになる。

漢や唐の夢書の佚文にも、類比法による夢占いの例が見られる。

丈尺は人の為に長短を正すものなり。夢に丈尺を得なば、人を正さんと欲するなり。

權衡は人の為に〔平〕正すものなり。夢に〔權〕衡を得なば、平端を為すなり。

亭は積功たり、民の成す所なり。亭を築くを夢みる者は、功績成るなり。

粗履は使たり、卑賤の類なり。夢に粗履を見るものは、僮使を得

るなり。(本書附録二、第14、15、7、37)

「丈尺」には「長短を正す」はたらきがある。擬人的な類推をはたらかせ、「丈尺」を夢に見たら、それは人の長短を正すとす。同様な方法で、「権衡」には両端を平衡にする特性があるから、権衡を夢に見たら公平な態度で人に接することができるとし、亭は人々の労力によって築かれた物であるから、亭を築く夢を見た者はまさに功業が成ろうとするところだとし、粗製の履は低級な履物であるから、粗履を夢に見た者は童僕を得てこき使うことができるだろうと判断する。このような比喻や類推について、根拠がないとも当たる筈がないとも言えないけれども、方法や理論の上では、夢を見た者がどんな情況にあつたにせよ、的中させるのは難しく、人を欺くのも難しい。仕立屋が「丈尺」の夢を見たら、おそらく「衣を量らんと欲する」のだろうし、職人が「丈尺」の夢を見たら、おそらく「材を量らんと欲する」のだろう。人の才能を選び識別してはじめて夢をこのように解釈できるのだ。粗製の履を童僕と結びつけて類推をはたらかせたのは、牽強付会もはなはだしい。

優れた占夢家なら夢書に拘泥することなく、夢を見た状況と関連させて類比する。例えば、魏の文帝が「殿屋の両瓦地に墮ち、化して鴛鴦と為る」という夢を見た時、周宣は夢書をひもとくかわりに文帝の周囲にどんな事が起こるだろうかと思いをめぐらせ、そこに類推をはたらかせたのである。屋根瓦が地面に落ちれば必ずこわれる。擬人的な類推によれば、それは死を意味する。人々はふつう鴛鴦を男女の愛情に喩える。皇帝の家族は民間から多くの女性を引っぱってくるから、

宮中の女性の死を意味するのだろう。よって、最終的には「後宮中に暴に死ぬ者有るべし」と占ったのだ。<sup>(9)</sup> このような類推は、誰もこじつけだとは気づかない。また、崔湜は座<sup>しやく</sup>って講演を聴く夢を見たが、当時崔湜が流刑の途中だったことから、「座下に法を聴くは、音の上より来る」から類推して、今に上からのお達しがあるだろうと判断した。<sup>(10)</sup> こうした類推は比較的理にかなっている。

陳士元は『夢占逸旨』(感變篇)に、「比象」の夢を記す。「比象」は、象徴法にも連類法にも、またその一部は類比法にも属する。例えば、「將に官に泄<sup>のそ</sup>まんとすれば則ち棺を夢み、將に錢を得んとすれば則ち穢を夢みる」の自注に晋人殷浩の「官は本より臭腐なり、故に官を得んとして尸を夢みる。錢は本より糞土なり、故に錢を得んとして穢を夢みる」ということばを引いている。このように、棺や穢の夢は一種の象徴である。ただ、「棺」から「官」を導くのは「諧音」によるものである。『異苑』に「糞汚なる者は、錢財の象なり」とある。ならば、穢の夢を見て錢を得るといふのは反説法ということになる。また、「將に雨ふらんとすれば則ち魚を夢み」、「將に食せんとすれば則ち犬を呼ぶを夢み」、「將に喪禍に遭はんとすれば則ち白を衣るを夢み」、「將に恩寵に沐せんとすれば則ち錦を衣るを夢み」など、すべて連類法に属することは明らかである。ただ、以下の二例は類比法に属す。

將に頭貴ならんとすれば則ち高きに登らんとするを夢みる。  
謀りて遂げざるを為さば則ち荆棘泥塗を夢みる。  
初めの例は人(頭貴)を事(登高)に擬え、後の例は事(荆棘泥塗)を人(謀)に擬え、その上で類推をしている。

#### 4 解読法

解読法は夢をまず記号化し、それから変換された記号をもとに、夢の意味を解釈したり、人事を説明したりする方法である。この占いは現代の暗号解読と酷似し、解読法のほかに記号変換法とも呼ばれる。夢を見た当人は夢の意味が分からないのがふつうで、占夢家に解読してもらってはじめてその意味が分かる。「暗号」が、「陰陽」、「五行」、「八卦」のいずれに置き換えられるのもすべて占夢家次第。神霊や鬼魂がどうして直接意思を伝えず、このように占夢家が翻訳しなければならぬのか、それは鬼神がわざと曖昧に示すため、占夢家しか鬼神の意を汲み取ることができないとしか説明できない。

この占いの方法はかなり複雑で、「陰陽」、「五行」、「八卦」の考え方が現れ、その影響力が大きくなってはじめて可能となる。既述のように、史墨が趙簡子の夢を占って、「火は金に勝つ、故に克たず」と言ったが、「火」は楚の国を表わす記号で、「金」は呉の国を表わす記号である。『論衡』（言毒篇）に、「人、夢に火を見れば、占ひて口舌と為す」とあるが、「火」は「口舌」を表す記号である。

晋代の占夢家のなかには、こうした占いを最も好み得意とした者がいた。鄧艾が蜀を討とうとした時、夜に夢の中で山上に座り、下に水が流れていた。護軍の爰邵は『周易』の卦にもとづき、この夢のイメージを「蹇卦」と解釈し、その後、さらに「蹇卦」によって吉凶を判断した。令狐策は氷上に立って氷下の人と話をする夢を見たが、索統は「氷上」、「氷下」を「陰陽」によって解釈した。張宅は馬に乗って山に上る夢を見たが、索統は「馬は離に属し、離は火を為し、火は、

禍なり」と言った。これはまず「馬」を八卦の「離」と解釈し、それから「離」を五行の「火」にあてはめ、さらに「火」と「禍」とが同音であるので、「火は、禍なり」と言ったのである。

索統の影響により、晋代およびそれ以後の一時期、解読法はずいぶん流行した。『晋書』符融伝下に、符融が八卦によって董豊の夢を解読し、董豊の妻が馮昌に殺されると推測した記事が載せられている。その占いの過程は策統のそれよりもさらに複雑である。

『周易』に、坎は水を為し、馬は離を為すと。馬に乗り南に渡り、北に旋りて南する者は、坎より離に之く。三爻同に変じ、変じて離を成す。離は中女を為し、坎は中男を為す。両日は、二夫の象なり。坎は執法の吏を為す。吏其の夫を誅め、婦人流血を被りて死す。坎は二陰一陽、離は二陽一陰、相承けて位を易ふ。離下坎上は、既済なり、文王之に遇ひて牖里に囚せられ、礼ありて生き、礼無くして死す。馬左して湿あり、湿は、水なり。左水に右馬なるは、馮の字なり。両日は、昌の字なり。其れ馮昌之を殺さんかと。董豊は遊学すること三年、帰郷の途次に妻の実家に泊ったが、その夜に妻子が殺害された。董豊は誰かに殺されたと思ったが、妻の親戚は董豊が殺したと思った。いったい誰が犯人なのか、この事件の判決は難しかった。事件が起こる前、董豊は馬に乗って河を渡る夢を見た。まず南に行き、後に北に行き、さらにまた北から南に行くというものである。符融は八卦により解読した。水の記号は「坎」、馬の記号は「離」である。南から北へ、また北から南へと行ったから、その行程を記号化すると「之」である。したがって、董豊の夢は「坎之離」と記号化

できる。「坎」の形は☵である、三つの爻が変れば「離」になるが、その形は☲である。「離」は二つの陽爻が一つの陰爻を挟んでいる、だから「中女」である。「坎」は二つの陰爻が一つの陽爻を挟んでいる、だから「中男」である。董豊は水中に「両日」があるのを見た、これはこの事件が二人の男と関係があることを象徴している。一人は董豊だが、もう一人は不明である。「坎」はまた執法の吏の象徴である。そして、それは上にあるから、坎上離下はまた「既濟」の卦になる。この卦の先例に、「文王之に遇ひ、之を羨里ゆうりに囚す」とあるから、もし被告側の筋が通れば(「礼」は「理」に通じる)、最後にはきつと囚中に生を得るだろう。また、夢の中で「馬左して湿あり」を、左に「水」、右に「馬」があることから、「馮」の字と解いた。「両日」が重なれば「昌」の字である。よって、董豊の妻殺害の真犯人は「馮昌」にちがいないと結論づけた。苻融の解説には牽強付会が目立つ。しかし、そこに占夢者の心理やこの占夢法の特徴が具体的に現れていると言えよう。

『晋書』に前趙の皇帝劉曜の夢の記事がある。太史の任義の占いも主に解説法によっている。咸和三年(三二八)、劉曜は「夜に三人金面にして丹唇、東に向かひて逡巡し、言はずして退き、曜拜して其の迹を履むを夢み」た。この夢を解釈した臣下の多くが吉祥の兆しと言ったが、任義だけはよくない事が起こる兆しと言った。彼の占いによれば、「秦兵必ず暴かに起り、主を亡むすなひ帥を喪なひ、趙地に留敗す。遠きは三年に至り、近きは七日に至り、其れ応に遠からざるべし」というもので、その占いの過程は以下のとおり。

三者は、曆の運統の極なり。東は震の位たり、王者の始次なり。金は兌だ位たり、物の衰落するなり。唇丹にして言はざるは、事の畢るなり。逡巡して揖讓するは、退舎の道なり。之が拜を為すは、人に屈伏するなり。跡を履んで行くは、慎んで疆を出でざるなり。

東井は、秦の分なり。五車は、趙の分なり。<sup>[1]</sup>

劉曜の時の都は秦(今の陝西省)の長安である。任義は、秦の地でもうすぐ戦乱が起り、これによって趙(前趙)が滅ぶだろう、そして、最後に滅ぶのはもとの趙(今の山西省内)の地であろうと判断した。なぜこの夢にこうした予兆があるのか。かれはまず、夢に現れた三人の「三」を「運統」における「三統三正」の「三」とした。「三」は一つの周期を終えること、終結することを示す。よって、「曆の運統の極」なりと言ったのだ。この記号変換には別の構想があって、即座に見解を下している。続いて、「東に向かひて逡巡」の「東」を八卦の「震」としたが、「震」は王が発する方位である。「東に向かひて逡巡」とは、王と再び出会うだろうということ。三人がともに金面とは、五行を八卦に当てはめると、五行の「金」は八卦の「兌」に相当する。「兌」は西方にあり、事物の衰退を示す。「唇丹にして言はず」は、ある事が終わっていることを示す。また、劉曜がかれらに向かって体を曲げて拜礼するのは、「人に屈服す」る、人に敗れ、人に降ることを象徴する。劉曜が三人の足跡を踏んで行くことから、兵乱後に趙国から出ることはないと予知した。なぜ兵乱が秦の地で起り、なぜ前趙が害を被るのか。任義は占星術によって夢を占ったのである。おそらく劉曜が夢を見たのは、太陽の位置が東井を離れて五車に移る頃である

う。東井はまた井宿ともいい、二十八宿の中では南方朱雀の第一宿に属し、地上では秦の土地の分野に相当する。五車は畢宿で、二十八宿の中では西方白虎の第五宿に属し、地上では趙の土地の分野に相当する。また、「遠きは三年に至り、近きは七日に至り」という時間も、おそらく夢を見た日時と関係があり、春秋時代の史墨の占いの方法を用いていると思われるが、その詳細については不明である。ただ、占いの過程全体から見ると、主に夢の内容を五行や八卦という記号に変換し、それをさらにこれと関係のある占いの方法に結びつけている。この書に記載される夢占いには、「占ひて驗有」らざるなきものばかりである。一年も経たないうちに、劉曜の前趙は石勒の後趙によって滅ぼされた。

解読法や記号変換法などの占いは、占夢家にとって融通を利かせる大きな余地があった。つじつまの合った夢解きをするために自在に記号変換し、夢解きが後到的中するように随意に記号変換するのである。しかしながら、ふつうのベテンスにはこういった芸当は望めない。この種の占いは相当に豊富な知識や機敏な頭脳の持ち主でないとできない。特に、陰陽、五行、八卦などの占いに精通していることが必要である。

## 5 解字法

解字法はまず夢を漢字の筆画に分解し、それから筆画を組立てている漢字をもとに、夢の意味を解釈し人事を説明するものである。本来、解字法も記号変換法や解読法の一つである。ただ、変換される記号は五行や八卦などではなく、漢字の筆画である点が異なる。

解字法によって夢を占う最も早い例としては、黄帝が風后と力牧を夢に見た話がある。「大風吹き天下の塵垢皆去る」という夢からまず「風」の字を、次に「垢、土を去らば、后在り」より「后」の字を導いた。二つを合わせると、姓が風で名が后という人名になる。人が「千鈞の弩を執り、羊万群を駆る」という夢から、まず「力」の字を、次に「羊万群を駆る」より「牧」の字を導いた。二つを合わせると、姓が力で名が牧という人名になる。既述のように、こうした占いの方法が文字の無い時代や文字のきまりが定まっていなかった時代にあつたはずはなく、戦国時代より前に遡ることはできないだろう。『左伝』の「止戈は武たり」が唯一の例である。戦国の諸子の書中に、「自營は私(ム)たり」、「背私(ム)は公たり」、「十を推して一に合はせば土と為る」、「刀の井を守るは刑たり」など、枚挙にいとまがない占夢家が解字法によって夢を占うことができたのは、その前提として、漢字を分解して解釈することが世間で流行していたことがある。

前漢の経学家が儒家の經典を解釈するのに、好んで解字を用いた。公羊学家の董仲舒は、「古の文を造る者、三画して其の中を連ねて之を王と謂ふ。三とは、天なり、地なり、人なり。而して之に参通する者は、王なり。孔子曰く、『一の三を貫くは王たり』と。」<sup>(10)</sup> と言っている。後に興る讖緯説には解字による大量の讖言や秘密めいたことばが見られる。『尚書中侯』に、「卯金刀の帝の出づるは、復た堯の後漢許慎の『説文解字』の社会的な影響力、あるいは社会の文化的要因などによって、「解字」が重要な占いの方法になっていったのである。

『塵談』によれば、劉邦が亭長だった頃のある夜、羊を追いかけて羊の二本の角と尾が抜け落ちた夢を見た。占夢者は「羊に角と尾無きは、王なり」と説いた。これは劉秀の夢とする説もあるが、いづれにしても後に付会されたものである。『後漢書』蔡茂伝に、蔡茂が「禾を失ふ夢」を見たが、「失禾は秩たり」より、官位が上り俸禄を得ると解いた。

夢占いにおいて解字法が最も普及したのは晋代で、中でも索統がその代表者であった。『晋書』郭禹伝に、郭禹が臨終に「夜夢に青龍に乗りて天に上り、屋に至りて止む」、それを自分で占って、「屋の字たる、尸上より下に至る。龍飛んで屋に至る、吾其れ死なん」と言った。「屋」の字を分解して「尸」の字を導き、死ぬ日がまぢかなのを覚ったのである。易雄伝には、易雄が「夜夢に車に乗り、肉を其の旁に挂くる」のを自ら占い、「肉に必ず筋有り、筋は斤なり（同音）。車の旁に斤有る、吾其れ戮せられんか」と言った。夢の中から分解して「車」と「斤」の二字を導いたが、それらを合せれば「斬」字となる。「王濬伝」に「刀を夢みる」話があり、後にほとんど典故のように用いられている。王濬が見た夢は、梁の上に四本の刀が懸かっているもので、王濬は不愉快な気持ちになった。主簿の李毅は、「三刀は州を為す（隸書の『州』字は三つの『刀』を並べた形に近い）。また、一を『益』すとは、明府其れ益州に臨まんか」、つまり、益州に榮転するだろうとお祝いのことを述べた。索統伝に、「虜」脱衣して「男」と為り、狼「脚」を食らいて「却」と為り、人山に上れば「凶」を為し、内中の人は「肉」を為すなどの占いの例があり、当時は人口に膾炙してい

たと思われる。

隋唐時代にも解字法が大いに流行した。例えば、「松は十八公を為す」とは、松の夢を見た者は十八年後に三公の位に至るといふもの（『旧唐書』張志和伝）。また、「槐は木旁に鬼たり」とは、槐の夢を見た者は死んで鬼となるといふもの（『夢占逸旨』字画篇に引く『隋書』、拓拔順の夢）。さらに、「失は牛の双尾を為す」とは、二つの尾がある牛の夢を見た者は財物を失うといふもの（『朝野僉載』）。中でも、隴西の李公佐が謝小娥のために夢解きをした話はとてもドラマチックである。謝小娥の夫と夫の父は商売に出ていて不幸にも殺された。父は夢の中で「我を殺す者は、車中の猴、門東の草なり」と言い、夫も夢の中で「我を殺す者は、禾中の走、一日の夫なり」と言った。謝小娥は方々にきいて回ったがその意味が分からず、誰が犯人なのか見当がつかなかった。後に李公佐がひそかにその意味を教えた。

車中の猴とは、申なり。門東の草とは、蘭なり。禾中の走とは、田を穿ちて走る、亦申なり。一日の夫とは、春なり。是れ汝の父を殺す者は、申蘭なり。汝の夫を殺す者は、申春なり。（『謝小娥伝』）

「車」中には「申」字がある。十二支の猴は「申」である。したがって、「車中の猴は、申なり」である。「蘭」は草冠で、「門」内に「東」字がある。「東」は「東」の俗字）したがって、「門東の草は、蘭なり」である。「禾中の走」は「田」中を通り抜ける意味、「田」字が突き抜けたら「申」字になる。「一日の夫」は、三字を合わせれば「春」字になる。これらのことより、二人の犯人は申蘭と申春ということが分

かった。李公佐は文学者で、この話は彼の創作であるが、真実か否かに関わらず、当時の人々の考え方や習俗を知ることができる。

こうした占いは後々までも行なわれ、「聞くは門中の耳」、「毛は千下の七」など、筆画の分解や合成は正確さに欠け、付会を免れない。

## 6 諧音法（同音法）

諧音法とはまず夢の内容と同音の字形や音声を取り上げ、同音によって夢の意味を解釈して人事を説明するものである。この方法は解字法と本質的な違いはない。ただ、夢を字形や音声に転換するという違いがあるだけである。もちろん、夢のどの部分を字形や音声に換えるかは占夢者のニーズによって変化する。

前に引いた『詩経』（小雅「無羊」）の「衆と維れ魚とは、実に維れ豊年なり」も、「衆魚」は豊年の象徴だけでなく、「魚多」と「余多」とが同音であるから、余るほどの収穫という意味にもなる。今でも農村に見られる年画に余るほどの豊作を意味するものがあるが、そこには太った子どもが一匹の大きな鯉を抱えている。これは、「有魚」と「有余」とが同音であることによる。しかし、先秦時代にはこうした諧音法の占いの例は数少ない。

後漢に許慎が『説文』を著し、後に劉熙が『釈名』を著した。訓詁の面から言えば、『説文』は主に形を説き、『釈名』は主に音や声を説く。後者は、音声が同じか近い字によって字義を説いている。これは先秦以来の成果にもとづき、当時の社会に大きな影響を与えた。三国時代の趙直は夢を占うのに、「桑」と「喪」とが同音であることから、桑の夢を不吉とした<sup>[13]</sup>。晋の索統は「火」と「禍」とが同音であるこ

とから、火の夢を見たら災禍を被るとした<sup>[14]</sup>。

六朝の民歌においても、諧音法は芸術的な手法として際立っていた。「蓮」と「憐」、「藕」と「偶」、「晴」と「情」、「芙蓉」と「夫容」など、数多く見られる。流行の波に乗り、あっという間に占夢に諧音法が頻繁に用いられるようになった。後世の雑記小説の中で諧音法による夢占いが取り上げられたものは数多い。

『葆光録』にこんな記事がある。張司直が病気になった時、子どもを孕む夢を見てとても気分を悪くした。ところが、占い師は「懷孕」は「妊娠」で、「妊娠」と「壬辰」とは同音だから、あなたの病気は壬辰の日に治ると言った。

『青箱雜記』（卷三）に所載の話。李文定は立派なひげをたくわえていたが、殿試の前夜にひげを剃られてしまう夢を見てとても不安だった。省試の状元は劉滋であったが、占い師は、ひげを剃るとは「剃髭」と「剃鬚」と「替滋」とは同音だから、今回の殿試の状元はあなただと解いた。同書にはまたこんな話もある。馬亮は江寧の知府であったが、任期が満ちた頃、夜に舌の上に毛が生える夢を見た。ある僧侶が占い、舌の上に毛が生えては剃ることもできない、「剃不得」と「替不得」とは同音だから、あなたは再任されるだろうと解いた。

『因話録』（卷六）に所載の話。柳宗元が永州の司馬から柳州の刺史に転任する前の夜、柳が倒れる夢を見たが、これを占った者は、「夫れ生れて則ち柳樹と為り、死して則ち柳木と為る。木は牧なり。君は其れ柳州に牧たらんか」と言った。

魏晋以来、棺木の「棺」と官職の「官」との同音を言うのは、官吏

の間でも庶民の間でもともに流行した。「將に官に泣<sup>な</sup>まんとして棺を夢みる」は、『世説』(文学篇)にも『晋書』(殷浩伝)にも見られる。雑記中のこうした夢占いの例はさらに多い。例えば、趙良器が十一個の棺桶を夢に見て、十一の官職を歴任し、中書の位にまで至った話(『定命録』)、あるいは、高達夫が多くの棺桶がある中で大きな棺桶に座る夢を見て、長史から詹事に昇進する話(同前書)、また、李逢吉の婢女の夢にある人が現れ、棺桶を堂の中に運んだ。その結果、李逢吉は中書舍人となったという話(『紀異録』)などがある。現存の『夢書』の残巻や佚文の中にも、多くの類似の占いの例が見られる。

夢に棺木を見るものは、官を得て、吉なり。(『敦煌遺書』伯3105)

夢に棺槨の中に入るを見る者は、官を得て、大吉なり。(『敦煌遺書』斯620)

夢に棺木を見るものは、民吏に官を遷して、大吉なり。(同前)

夢に棺木を見るものは、官事利あり。(同前)

棺材は民間では略して「材」と呼ばれ、「材」と「財」とが同音であるから大吉とされた。例えば、

夢に死して棺槨の台に在るを見れば、財を得。(同前)

夢に棺の死人を照らすを見れば、財を得。(同前)

棺木を拜するを夢みれば、大吉にして、財を得。(同前)

夢に棺中の死人を見れば、財を得。(『敦煌遺書』伯3105)

以上の六種類の占いの方法は、単独で用いられることもあれば、いくつかを組み合わせて用いることもあり、しばしば互いに入り混じり影

響しあっている。このことはこれまでに挙げた夢占いの例から容易に見い出すことができるので、ここではこれ以上は述べない。

### (3) 反説

直解と転積とを比べれば、転積の方がより融通性に富む。ただ、夢の中には夢の内容と後の結果とが反対になる場合がある。そんな時は転積もつじつまを合わせるのは難しい。夢が現実の出来事を予兆するものだとすれば、占夢者はこれを「反兆」とするしかない。そこで、直解や転積以外に、反説という占夢法が必要になる。

反説とはつまり、夢を逆にする、夢を反対に解釈して人事を説明するものである。占夢の理論によれば、夢には「反夢」や「反極の夢」があり、「極めて相反するを造<sup>な</sup>し」、あるいは「象を反して以て徴す」という特徴がある。反説も占夢の方法の一つであることはまちがいない。

おそらく人々は夢の予兆と人事とが逆になることがあるのを早くから気がついていただろう。一部の少数民族は、反説による夢占いを早くから行っていた。例えば、ヤオ族は、家を焼く夢は金持ちになる予兆、他人や自分が死ぬ夢は長命で幸福になる予兆、自分が哭く夢は幸運の予兆と信じている。チンポー族は、酒を飲んだり肉を食べる夢は凶兆で、近所か村に死人が出る予兆だと信じている。<sup>1)</sup>ただ、これらの民族には「反夢」ということばもなく、また反説を意識的に夢占いの方法としていたのでもない。

先秦時代の漢民族が反説によって夢占いをした例は、今は文献にわずしか見られない。『莊子』齊物論篇に「夢に酒を飲む者は、旦に

して哭泣し、夢に哭泣する者は、且にして田獵す」とある。ただ、どうしてそうなるのか説明がない。おそらくこの占い方法がかなり複雑なためだろう、後漢時代になってやっと反夢の例を見出すことができる。『潜夫論』夢列篇に、

晋の文公、城濮の戦に於て、楚子の己に伏して其の腦を鹽るを夢みるは、本より大悪なり。戦に及んで、乃ち大いに勝つ。此れ反夢を謂ふなり。(本書附録一、新校)

とあるが、この夢をもし直解したら、大悪大凶になるはずで、それで晋の文公はおびえたのだ。転釈を用いたとしても、誰が勝ち誰が負けるかを説明するのは難しい。晋の文公の臣下に子犯という者がいた。かれは「反説」を用い、この夢は凶夢でないどころか吉夢というべきですと言った。もちろん、反説は単純に夢を逆にすればそれでむむというものではない。逆に、占いの理論を説明しなければ、夢を見た者は納得しない。ここで子犯の夢解きを見てみよう。

吉なり。我は天を得て、楚は其の罪に伏し、吾は且つ之を柔にす。  
〔『左伝』僖公二八年〕

子犯の解釈はこうである。夢の中で晋の文公は楚子によって地上に押し倒されたが、文公は仰向けで天を向いている、だから「天を得」るという意味。また、楚子は文公のからだに覆いかぶさってはいるが、顔を地面に向けているのは「罪有る」の意味。また、楚子が歯で文公の脳をかんだのは、所謂、柔よく剛を制するという意味。焦循は『素問』の注により、脳髓は「陰柔、故に子犯言ふ、『吾且つ之を柔にす』と。彼来て我を鹽るに歯を用ふ。歯は剛なり。我は脳を以て之を承け、

是を以て其の剛を柔にす、故に曰く、『之を柔にす』と。」したがって、子犯は我々が必ず勝つだろうと説いたとする。<sup>[15]</sup> 彼がここで象徴法を用いたことは明らかであるが、全体的には反説の方法を用いている。

漢魏以降、反説を用いた夢占いはますます増加していく。『南史』沈慶之伝に、沈慶之が皇帝の儀仗隊を率いて厠に行く夢を見て、とてもいやな気分になっていた。けれども、当時の「占夢を善くする者」は、あなたは「必ず大いに富貴とならん」と説いた。『北齊書』李元忠伝に、李元忠が出仕する直前に、手に松明を持ち父親の墓穴に入る夢を見て、驚いて真夜中に目が覚めた。しかし、それを聞いた彼の師は占って「大吉」とした。齊梁時代の学士の蕭琛はこうした反兆の夢を「反中詭遇」と称した。<sup>[16]</sup> 彼は『左伝』から二例を挙げている。それは、趙簡子の夢に童子が歌舞するのを解いて、呉が郢に侵入する予兆とした話。さらに、小臣が景公を背負って天に昇る夢を見て、殉死してしまう結果となった話である。

宋の蘇軾の『物類相感志』に、夢は「或は翻倒して象を成せば、則ち亡者を号泣するは、却つて官を拝し爵を受くるの応を得ん」とある。宋明時代の雑記小説にはよくこうした夢占いの例が集められ引用されている。『太平広記』(巻二九七)に引く『紀聞』に、晋陽のある人が虎に噛まれる夢を見たが、その母は、「人言へらく、夢に死すれば生を得んと。夢想の顛倒するが故なり」と言ったとある。『說郛』(巻三二)海山記に、隋の煬帝が牛慶兒のために夢解きをして、「夢に死すれば生を得ん」と言ったとある。『拍案驚奇』二刻(巻一九)にも、「夢是反的、夢福得禍、夢笑得哭」とある。もちろんすべての夢を逆

に解釈することはできないが、反対になる夢があることは確かである。どんな夢が反対になるのかは占夢者次第である。陳士元『夢占逸旨』(感変篇)は「反夢」を称して「反極の夢」とし、理論的に帰納しようとしてみている。

何をか反極と謂ふ。親姻燕会有らば、則ち哭泣を夢み、哭泣口舌争訟有らば、則ち歌舞を夢み、寒ければ則ち暖を夢み、饑うれば則ち飽くを夢み、病めば則ち医者を夢み、憂孝ならば則ち赤衣絳袍を夢み、慶賀なれば則ち麻直しよ凶服を夢みる。此れ反極の夢なり。其の類は推すべきなり。

歴代の夢書の残巻中、そのかなりの部分は反説によって夢の吉凶を占うものである。例えば、死傷者を夢に見たら、死傷しないどころか、財を得たり長生きする予兆であったりする。

夢に斬傷して出血するを見れば、大吉なり。(『敦煌遺書』斯620)  
 夢に刀の傷つく所と為れば、大吉にして、財を得。(同前)  
 夢に人に縛せらるるを見れば、大吉なり。(『敦煌遺書』伯3281)  
 夢に身の死するを見れば、必ず長命なり。(『敦煌遺書』斯620、伯3281)

また、夢に哭泣するのを見た者は、災禍に遇わないどころか、おめでたいことがある予兆とされた。

夢に哭するを見れば、余慶、善事有り。(『敦煌遺書』斯620)  
 夢に人の行哭するを見れば、殃魅除かれ、吉利なり。(同前)  
 夢に哭泣するを見れば、善事有り。(同前)  
 夢に哭泣するを見れば、慶賀の事有り。(『敦煌遺書』伯3281)

また、夢に汚い物を見たら、病気になるどころか、財を得る予兆だったりする。

夢に糞汚の衣を見れば、財を得。(『敦煌遺書』斯620)  
 夢に廁所を見れば、亦財を得。(同前)  
 夢に衣衫を汚せば、財を得。(『敦煌遺書』伯3281)  
 夢に廁に陥ち衣を汚すを見れば、財を得。(同前)

その他、虎に驚く夢を見れば大吉(『敦煌遺書』斯620)、虎に乗って行く夢を見たら大吉(同前)、家に火が燃え移る夢を見たら大金持ちになり(同前)、家が火に焼かれる夢を見たらめでたいことがあり(同前)、流血する夢は昇進する吉夢(『敦煌遺書』伯3281)、病気になる夢を見たら喜ばしいことがあるなど(同前)、こうした夢はいくらでもある。

夢を占うのに、ある時は直解を用い、またある時は反説を用い、占夢者はすべて思い通りに事を運ぶので、ますます占夢の神秘性を高めることになる。ある人がこんな疑いをもつのも肯ける。「夫れ夢に好きことを見れば即ち吉、悪なれば即ち憂ふ(直解)。智者(占夢者)の指して之を解き、悪夢は即ち吉(反説)とするは若何。何の愚人か之が好き夢と説くに、変じて凶と為さるるか」と。(『敦煌遺書』伯3908序)宋代の秦觀の詩にも、「世に伝ふ凶を夢みれば常に吉を得、神物戯人良に旨有り」と詠じる<sup>(13)</sup>。もともと、夢は神靈や鬼神が人に与える啓示だといわれるが、なぜある時は直解し、またある時には反説するのか、まったくおふざけもいところだ。

西洋における古代の占夢の情況についての体系的な研究はない。た

だ、理論的に考えて、直解、転釈、反説の三つの方法を超える方法は考えられない。西洋の諺にも「夢は逆になる」、「夜に見る夢は昼の事とは逆になる」などがあるが、これらはまさに反説である。<sup>19)</sup> いかにか転釈するかという具体的な占いの方法は、世の東西においてそれぞれ多少の相違が見られようが、それはほんのわずかな違いといえよう。

### (三) 占夢家の遁辞と付加条件

夢を占うには、直解、転釈、反説など、必要に応じてどれを用いてもよい。ここに占夢者の融通性が最大限に發揮される。しかし、融通性をはたらかせても、必ずしも的中する保証はない。事実、歴代の占夢を見れば、当たったものは少なく、はずれたものは多い。宋代の類書『太平御覧』には「応夢」の項目が立てられている。ただ、そこに収録された応夢はわずか数十条にすぎない。後世の収集によっても、何百とか何千の数にすぎない。一方、古今にわたる人々の夢は何億何兆に上るのか検討もつかない。

ならばなぜ占夢が通常、的中するよりもはずれることが多いのか。それは、占夢自体が曖昧で虚偽と欺瞞の要素をもっていることが主な原因である。当然のことながら、占夢者はこの点について認めようとはしない。占いがはずれるのは、夢を見た者と占った者の両者に原因があると、かれらは考えているからだ。『潜夫論』夢列篇は、以下のように記す。

今一寝の夢、或は屢ば遷化し、百物代々至りて、其の主は之を究め道ふ能はず、故に占者に中らざること有るなり。此れ占の罪に

非ざるなり、乃ち夢みる者の過なり。或は其の夢は審なり、而れども占者は類を連ね観を伝ふ能はず、故に其の夢の驗せざること有るなり。此れ書の陋に非ず、乃ち説の過ちなり。(本書附録一、新校)

夢を見た本人は、一夜のうちに見た夢と後に見た夢とが絶えず変化するので、はっきりと言ひ表せない。はっきりと言ひ表せなければ、占っても当たらないのは当然だから、占った者を責める道理はない。占った者が、夢書を弾力的に運用できなければ、占っても当たらないのは当然で、夢書を責めることはできない。これが王符の主張である。しかし、仮に夢を見た者がその夢をはっきりと述べ、占う者が弾力的に理解し運用したとして、占いが必ず的中すると言えらるうか。そうとは限らないだろう。占いがはずれる情況に置かれた占夢者は、適当にごまかそうと、さまざま遁辞を用意している。その中でも極めて例を二つ。

その一、人によって夢のとおりになったりならなかったりすること。もし、あなたの夢を占ってそれがはずれたら、それは夢を見たあなたが特殊な人だったからだ。王符はそれを「人夢」と称している。

同じ事も、貴人之を夢みれば即ち祥を為し、賤人之を夢みれば即ち妖(殃)を為し、君子之を夢みれば即ち栄を為し、小人之を夢みれば即ち辱を為す。(本書附録一、『潜夫論・夢列』新校)

後に、陳士元もこの考えを推し進めて、以下のように述べる。

帝王に帝王の夢有り、聖賢に聖賢の夢有り、與台廝僕に、與台廝僕の夢有り。窮通虧益、各々其の人に縁る。凶人に吉夢有り、吉

と雖も亦た凶、吉の幸すべからざればなり。吉人に凶夢有り、凶と雖も亦吉、凶猶ほ避くべければなり。〔『夢占逸旨』古法篇〕

夢を見た者の社会的な地位や職業などによって、同じ夢を見てもそれぞれの意味合いが異なることは認めるが、しかし、それと夢が当たるか否かととは別問題である。この解釈によれば、あなたの夢自体は吉夢でも、あなたの地位が低く、あるいはあなたが「凶人」だから、それで吉の結果にならないということになる。反対に、あなたの夢自体は凶夢でも、あなたの地位が高く、あるいはあなたが「吉人」だから、それで凶の結果にならないことになる。凶夢が凶の結果にならないのはいいにしても、吉夢が吉の結果にならない責任が、夢を見た者に押しつけられている。

その二、その人が誠実か否かにより、夢のとおりになったりならなかったりすること。占夢の理論によれば、占夢は神意を示すというきわめて神秘的なもので、軽々しく用いるべきではない。夢列篇に、「唯だ其の時に精誠の感薄する所、神霊の告ぐる所有らば、乃ち占ふべきのみ」(本書附録一、新校)とある。ことはを換えれば、夢占いには誠実さが求められ、誠ならば則ち霊に、誠ならば則ち験ずである。あなたの夢を占ってそれがはずれたなら、それはあなたの心に誠実さがなかったからなのだ。このように、占いがはずれた責任は、夢を見た者に押しつけられるのだ。誠実か否かは心の問題で、目に見えない、だから、かれ(占う者)はあなた(夢を見た者)の心に誠実さが足りないからだと言いきるのだが、あなたは反駁しようがない。

無論、占夢者はやむを得ずそうするのであって、こうした言い逃れ

を好きこのんでしているわけではない。彼らもいつもなんとかして占いが当たるように方法を考へてはいるのだ。それで彼らは占夢に多くの付加条件を付けることになる。『夢占逸旨』(古法篇)はこれを、「夢に五不占有り、占に五不験有り」と説明している。

「五不占」とは、夢を見た者に対する条件である。

その一。「神魂未だ定まらずして夢みる者は占はず」。陳士元は輔広の説を引き、先王の占夢は「謹んで天人の際を致した、而るに後世では多くの人が日中はほんやりしていて、自分が何をしているのかはつきりしない。それでその中の出来事のいくつかが夢に現れても一層混乱するのがおちである。夢を見ている者は「神魂未だ定まらず」なので、この夢はまだ「天人の感応」が起こっておらず、神意の啓示もないので占うことができない。たとえその夢にある徴候が見えたとしても、「迂回隠約」して、後で振り返ってその夢の意味を推し測ることができるだけである。

その二。「妄慮して夢みる者は占はず」。「妄慮」とは、白昼の妄想。この妄想は神霊や鬼神とは関係がないから、これを夢に見ても人事の徴候とは考えないというもの。けれども、周宣が、「夢は意なるのみ、苟くも以て言に形あはせば、便ち吉凶を占ふ」と言っているではないか。陳士元がこれをどう解釈したかは定かではない。

その三。「寤さめて凶阨やくなるを知る者は占はず」。「寤めて凶阨なるを知る」とは、つまり、夢を見た者が覚めてから自分でその夢が凶悪で災禍を被ると悟ったことを言う。自分で凶悪だと知ったとすれば、既に自分で自分の夢を占ったことになる。自分で占ったなら、もうこれ

以上占う必要はない。なぜか。陳士元が引く『左伝』の杜注に、『伝』は数、夢を占ふを戒む』とある。<sup>[17]</sup>「数、占ふ」とはどういうことか。「数、占ふ」はおそらく占うたびにその結果が異なることをいうのだらう。そんなことをすれば神意は曖昧になり、神霊に対しても不敬ではないか。実際、一般の人たちは自分が見た夢からある漠然とした予感を得るだけで、占夢者や占夢に通じた者だけが「寤めて吉凶を知ること」ができるのである。

その四。「寐中に撼病して夢未だ終らざる者は占はず」。「寐中に撼病」とは、夢を見ている時に、大きな音を聞いたり人に激しく推されたりして、夢の途中で目が覚めることをいう。こうした夢も占うことはできない。

その五。「夢に終始有れども、覚めて其の半を失ふ者は占はず」。「寐中に撼病」すれば、その夢には始めはあっても終りが無い。覚めてから夢の結末しか憶えていなければ、終りあれども始めなしである。とにかく、夢の前後が完全でなければ占うことはできないのだ。

客観的に見て、「五不占」の第四と第五は理屈がとおってはいなくはない。ただ、第一、二、三は占夢者が用意した逃げ道にすぎない。うまく占えないとか自信がない場合には、上記の条件に従って占うのを拒否すれば、占いがはずれることはない。

「五不驗」とは占夢者に対する要求である。  
その一。「その本原に昧き者は、驗せず」。「その本原に昧き」とは、夢が神意の啓示であり神霊や鬼神によって生れるということを占夢者が理解していないことをいう。このような人は占夢を理解しておらず、

また信じてもない「しろうと」で、だから占っても当たらない。

その二。「術業専らならざる者は、驗せず」。占夢の方法を全く知らないとか少ししか知らない、そんな占夢に精通していない者が他人の夢を占っても、それは当たらない。

その三。「精誠未だ至らざる者は、驗せず」。夢を見た者は誠実な心で夢を占わねばならず、占夢者も誠実な心で夢を占わねばならない。誠実であってはじめて「神に通じる」ことができ、「神に通じ」てはじめて夢を占いその意味を知ることができる。そうでなければ、たとえ技術を知っていても当たらない。けれども、一体、かれらが誠実なのか不誠実なのか、「神に通じ」ているのか騙しているのか、それらは彼らのみぞ知るだ。

その四。「遠きを削りて近きと為す者は、驗せず」。「遠きを削りて近きと為す」とは『漢書』芸文志・数術略に、「道の乱るるや、患ひは小人にして強いて天道を知らんと欲する者より出で、大を壊して以て小と為し、遠きを削りて以て近きと為し、是を以て道術破碎して知り難し」とあるのにもとづき、占夢の「大道」を知らず、小手先のわざを弄する輩をいうもの。その四は、これまでの三条を総合した内容になっている。「その本原に昧」ければ「大道」を知るはずもないし、「術業に精ならざり」れば、小手先のわざを弄するほかない。また、「大道」を知らずに小手先のわざを弄するのは、誠実さに欠けるからで、これでは占っても当たるとはならない。

その五。「両端に依違する者は、驗せず」。「両端に依違する」とは、同じ夢を解きながら、前後相矛盾することをいう。夢を見た者のご機

嫌を取ろうとして吉夢と言ったかと思えば、人を欺いて凶夢と言ったりするもの。占夢の吉凶が不確かなのに、どうしてその占いが当たるはずがあるろうか。

「五不驗」は、占夢者に対する厳しい要求のように思われるが、実際は退歩と見せながら前進をもくろむもので、占夢家たちの占いが当たらないことを言うものの、占夢そのものを全くの迷信ときめつけるのではない。つまり、占夢家の占いが当たらないのはその占夢家の責任で、占夢自体が神聖で靈驗のあるのは疑いようもないとするのだ。

既述の遁辞と付加条件のほかに、占夢者はいつも占いの結末を曖昧にし融通性をもたせる。占いの結果が明確であっても、「的中」する時間や場所に大きな幅をもたせるのである。例えば、趙直は「角字は刀下に用なり。其れ凶なること甚だし」と言いながら、凶となる時間と場所には触れていない。<sup>(18)</sup> 周宣も「後宮に当に暴に死ぬ者有るべし」と言って、場所を限定したものの、その時間は限定していない。芻狗<sup>(19)</sup>の夢を三度占いながら、具体的な時間を限定することはなかった。このように、数ヶ月も半年も結果が現れなくても、「まだその時になっていないのだ」とすましていられるのだ。だから、こうしたやり方を小細工と言われてもしかたがない。

#### (四) 占夢における心理分析

従来、占夢が当たることが少ないのが通例だが、それでも占いが当たったという者もいくらかはある。そうでなければ、誰が占夢を信じ、またそれに欺かれたりしようか。周宣や素統は一時期、我々の想像以

上にもてはやされていた。占いが的中した例も確かにあったわけ、ここに、占夢がどうして的中する時があるのかという問題が起こってくる。中国古代の無神論者たちは、たいていこれを「まぐれ当たり」とか「偶然の一致」などと言う。歴史的に見れば、占夢が進歩し合理性をそなえるようになったと言えよう。しかし、「まぐれ当たり」とか「偶然の一致」と言うだけでは、本当に問題を解決したことにはならない。さらにもう一步踏み込んで、ではなぜ「まぐれ当たり」や「偶然の一致」が起こるのかと問う必要がある。占夢が時の中するのは、占夢家の中には優れた者もいたこと、特に夢を見た者の状況を具体的に分析したり、夢の内容によって夢を見た者の心理を分析することに優れた者がいたためである。直解、転釈、反説など、どんな方法を用いるかは、夢を見た者の具体的な情況、中でもその心理状態と関連させた上で決める。口から出まかせのでたらめではだめだ。

「心理分析」はまた「精神分析」ともいい、現代のヨーロッパで生まれたことばであるが、何も彼らの専売特許ではない。中国古代の占夢者は、占いが的中するように、これまで夢を見る原因や夢に現れた心理状態を重視してきた。『周礼』春官・占夢に見える「六夢」には、正夢、噩夢<sup>がく</sup>、思夢、寤夢、喜夢、懼夢があり、夢の中の心理状態によって分類している。『潜夫論』夢列篇は、占夢には「内に情意を考え」ることの必要性を強調している。「情意」も人の心理を指す。もちろん、占夢家は心理学者ではないから、心理学者のような知識や技能を持たない。ただ占夢という職業に携わるからには、占夢家は臨機応変に夢を解き、占いが当たるようにするべく、夢書を盲信するのではなく、

心理分析にも気を配るべきだ。

『晋書』索統伝によれば、太守の陰澹は夢占いに優れた索統をとても敬服していた。陰澹はかれの所に行つて夢書を手に入れようとした。そうすれば、索統のように優れた夢占いができると思ったからである。ところが、索統のことばは意表をついていた。

昔太学に入り、一父老に因りて主人と為す。其の人知らざる所なく、又姓名を匿し、隠者に似たる有り。索統因りて父老に従ひて「審測して説」くとは、占夢の神秘を太学の老人に語らせながら、索統自ら占夢の法を総括したものとも言えよう。所謂「審測」とは、「審」

によって「測」る、まず「審」にしてそれから「測」ることである。どうやって「審」にするのか。当然そこにはいわくがあり、「夢を審らかにし」、かつ、「人を審らかにする」ことが必要である。そして、心理分析や精神分析がそれらの鍵を握っている。優れた占夢家なら、夢を見た者の話を聞いただけですすようなことは決してしない。かれらはいつも遠回しな言い方で、夢を見たときの状況をたずね、それらを照合して分析する。分析の後、夢を見た者が将来どんな活動をするのかを予測して、そのいくつかの可能性を比較検討する。これらの手続きがすんで、はじめて夢を見た者に向かって夢解きをするのである。例えば、索統が令狐策の夢を占った時も、まず夢を見た者にあれこれと質問して状況を探り、それから夢自体を分析していた。夢を見た者が水上に立って水の下の人と話をするという夢をもとに、心理状態やその原因について考えるのである。誰かと何かを交渉するのに、

ある間隔を置く。間隔を置くことで、誰かの頼みごとを聞いて交渉することが出来る。さらにかすかな手がかりをもとに、令狐策が誰かの媒酌人になると予測する。史伝はこの話を神秘化しようとして、こうした経緯を省略してしまったのだ。それはその奥深い意味やこの方面の事柄に無関心だったからかもしれない。

また、『洛陽伽藍記』に楊銜之が楊元慎の占夢を評して、「義は万途を出だし、随意に情を会る」と言った記事がある。<sup>(20)</sup>「義は万途を出だし」とは、変幻自在な方法で人の意表をつくことをいう。「随意に情を会る」とは、占夢者の「意」のままに、夢を見た者の「情」を知ることが出来ることをいう。占夢者の「意」とは、夢を臨機応変に解く必要性で、夢を見た者の「情」とは、その精神や心理のことである。例えば、夢を語る時のように、語られた夢の内容、夢占いを求める時のようになど。「情を会る」とは、これらの心理状態を吟味して分析することをいう。予測が当たり、分析が正しければ、夢を見た者は夢解きの結果に満足し、時には占夢者が人事にこじつけるのを助けたりもする。実際、夢書はふつう融通がきかないものだ。占いのことばがあっても、夢を見た者の心理を分析するだけで、具体的に吉凶を占うことをしない。例えば、夢書に「夢に何かを見れば、何かを憂える」とあるだけで、何を予兆しているかを言わない。

夢に牀の壊るる所を見る者は、為に妻を憂ふるなり。(本書附録二、第13)

夢に帷帳を見るものは、陰事を憂ふるなり。(第12)  
夢に雄鶏を見るものは、武吏を憂ふるなり。(第59)

夢に鷹鷄を見るものは、賊人を憂ふるなり。(第58)

夢に蜘蛛を見るものは、懐妊せる婦人を憂ふるなり。(第65)

夢に門戸を見る者は、子孫を憂ふるなり。『敦煌遺書』斯620)

夫婦が同衾して、「ベッドが壊れた」夢を見たら、そこに必ず心理的な原因があると、誰しも思うだろう。離婚、家出、病死など、妻に対する夫の心配が原因となって、「妻を憂ふる」夢を引き起こすのである。

帷帳の役割は、内と外とを隔て、外から見えないように遮断することである。よって、帷帳の夢にも人から見られたくないというような心理的な原因がある。雄鶏は闘いを好み、鷹鷄は獲物を捕まえるのが得意であるが、これを人事に当てはめれば、武士や盗人といったところだから、それらを夢に見たら、「武吏を憂ふる」とか、「賊人を憂ふる」ことになる。蜘蛛は腹が大きく、まるで妊婦のようである。だから、

蜘蛛の夢を見たら、妻が流産したりしないか心配したり、妊娠した妻のお腹が蜘蛛のように大きくなるよう願ったりするような、妊婦を憂える心理を反映しているのである。人は皆子孫は一家を支える柱と見なす。それで、夢に現れた門は子孫の象徴とされる。門が壊れる夢は、子孫が物にならないのではと心配する気持ちを反映している。以上の分析は、百パーセントの確信はないが、常識的に考えれば、現実と一致していると言えよう。注意すべきは、これらの占いのことばは夢書に見え、占夢に属してはいるが、しかし、これは純然たる心理分析で神秘性のかけらもない。

夢書にはまた、「夢に何かを見れば、何かをしようとする」と言うだけで、具体的な吉凶を言わないものがある。もちろん、「何かを憂

える」のと、「何かをしようとする」のとは異なる。「欲」は多義語の一つで、「くを欲す」とは、夢を見た者の希望を表したり、これから起こることを示すことばである。ここに心理分析や占夢者のわざの見せ所がある。例えば、

牘札は人の為に薦挙す。夢に牘札を得たれば、薦挙せんと欲するなり。(本書附録二、第68)

丈尺は人の為に長短を正すなり。夢に丈「尺」を得たれば、人を正さんと欲するなり。(第14)

困碁を夢みる者は、闘はんと欲するなり。(第26)

夢に吹囓(簫)を見る者は、求むる有らんと欲す。(第8)

夢に甑を見る「者」は、妻を娶らんと欲す。(第28)

夢に堂中に棺有るを見るものは、富貴ならんと欲す。『敦煌遺書』斯620)

「牘札」は古代の書簡である。役人になるには、ふつう推薦状がいる。手紙の夢は大抵誰かに推薦されて役人になりたいという希望の反映である。よって、「薦挙を欲する」である。しかし、「薦挙を欲する」は、「今に人に推薦されるだろう」という意味でもある。これは心理分析ではなくて、人事に対する占いである。占った後に誰かの推薦を受けたなら、占夢者はきつとこう言うだろう、「どうだい私の占いは、当たっただろう」と。もし、誰からも推薦されなかったなら、占夢者はこう言うだろう、「私はあなたが誰かに推薦してもらいたいと思っただけだ」と。どのみちかれらの言うことは筋が通っていて、それもかれらのわざの一つと言うべきだろう。「丈尺」の夢は「牘札」

の夢と情況は同じである。「聞はんと欲す」、「求むる有らんと欲す」、「妻を娶らんと欲す」など、これらに関連の夢はともそれぞれの欲望や心理を反映していて、一概に迷信ときめつけることはできない。ただ、「今に闘うだろう」、「求めることが有るだろう」、「妻を娶るだろう」という解釈は、占いの結果とも迷信とも考えうる。「堂中に棺有り」の夢にはもう少し説明がいる。「棺を夢みれば官を得ん」とは、古くから言い習わしてきたことばで、「堂中に棺有り」という夢を見たら、それは役人になりたいとか裕福になりたいとかいう願望の現われと見なされている。ただ、「堂中に棺有り」という夢を見たら必ず裕福になれるかという、必ずしもそうとは限らない。夢占いの常套手段として、どっちつかずの曖昧な判断をしていることが容易に読み取れよう。ただ、「くを欲す」という占いの結果に、心理分析の要素もあることは否定できない。

占夢の三つの方法に、占夢者のこじつけが行なわれていることを指摘したが、偏見を持たずに言えば、占夢者はこじつけをする過程で、無意識に心理分析を行なっているのである。例えば、転積や反説は、夢のイメージと意味とを区別している。転積のうちで、象徴法は客観的に言って、長期にわたって培われた民族やその社会特有の心理にもとづくもので、それぞれの夢にいかなる象徴的な意味があるか任意にはきめられない。転積のうちで、連類法、類比法、解読法、解字法、諧音法などは、どれも夢の「転移作用」やその特性および表出の仕方などと関係がある。反説や反極の夢も、夢を見た者の矛盾した心理や変換の方式と関係がある。これらのことの多くはフロイドの夢分析と

驚くほど一致している。敢えて言うなら、フロイドが古代中国の占夢法に真剣に取り組んだなら、興奮して叫び躍り上がっただろう。フロイド自身、かれが説く夢の象徴的意味が「ある程度、古代あるいは現代の夢解きの内容と一致するだろう」と言っている<sup>15</sup>。もちろん、占夢が迷信であるのに対して、心理分析は科学であり、それぞれ別個の範疇に属している。ただ、古代中国の占夢法には心理分析という科学的要素が含まれ、占夢が迷信であるからといってこの事実を否定することはできない。それは占星術が天体の観測や計測などの科学的要素を含んでいるのと同じである。

最後に指摘すべきは、夢を占うときに占夢者が行なう心理分析である。夢を見た者はふつう夢から人事にわたる過程を知るだけである。しかし、実際には、人事から夢へとたどる逆の過程もある。夢を見た者はこの逆の過程には気づかないが、占夢においてはきわめて重要である。逆の過程をたどることで、占夢者は臨機応変に夢を解くことができるのである。周宣が曹丕の「磨銭」の夢を占った記事を見てみよう。

帝（魏文帝曹丕）問ふ、「吾夢に銭文を磨き、滅せしめんと欲すれども更に愈々明るし。此れ何の謂ぞや」と。宣悵然として対へず。帝重ねて之を問ふに、宣対へて曰く、「此れ自ら陛下の家事、意爾るを欲すと雖も太后聴ゆるさず、是を以て文滅せんと欲すれども明るきのみ」と。時に帝、弟植の罪を治めんと欲すれども、太后に偏ひとられ、但だ貶爵を加ふるのみ<sup>21</sup>。

周宣が曹丕の夢を占ったとき、曹丕はすでに皇帝になっていた。その

前に皇太子擁立をめぐる問題にからみ、皇帝即位後、曹植に対して迫害を加えた。最初に曹植についていた丁儀と丁翼を殺し、続いて曹植を封地につけて嚴重なる監視下に置き、死地に追いやらなければ気がすまないという曹丕だった。このように曹植を迫害したが、皇太后にじゃまされ、結局は「貶爵」とどまった。この間の事情は当時誰もが知っており、周宣も事前に予測していた。当時の曹丕の心理状態から、周宣が「磨錢」の夢を彼の行動と結びつけたのはとっぴなことではない。「陛下の家事」とは、夢から人事へと順に進む過程をとったもの。しかし、そこから再び「磨錢」の夢を仔細に分析している。その具体的な方法とは、「錢紋」は曹植を象徴する物で、「吾錢文を磨く」とは曹丕の欲望を示し、また、「更に愈々明るし」とは皇太后にじゃまされて曹丕の欲望が果せず、かえって曹植に人々の同情が集まることを意味している。これと逆の過程とは、夢の内容を逐一説明した後、改めて曹丕にこう言うのである、「意爾るを欲すと雖も太后聴さず、是を以て『文滅せんと欲すれども明きのみ』と。こうして、曹丕の心理をしっかりとらえ、それを当時の情況に合わせ、夢の解釈をかつちりと夢の内容と結びつけたのである。曹丕は即位後、気づかぬうちに周宣のとりことなっていた。周宣の有名な「三たび芻狗の夢を占ふ」話も、曹丕の心理状態などをもとに、逆の過程をたどる分析方法をとったものと思われる。芻狗の夢から順にたどる単純な分析方法では、「三たび占ひて同じからず」という現象は起こりようもない。

このように、占夢にも他の占いとよく似た情況が見られるのである。ただ、ベテン師どもはその秘訣に疎い。

原注

- (1) 『未開社会の思惟(原始思惟)』(商務印書館、一九八一年)四九頁。
- (2) 『論衡』紀妖篇を参照。
- (3) 『左伝』隱公の杜預注および孔穎達の疏を参照。
- (4) 『康熙字典』「柳」字の積文。
- (5) 『史記』外戚世家。
- (6) 『三国志』魏志 鄧艾伝。
- (7) 『晋書』索紞伝。
- (8) 現存の『周易』の繇辭と『説卦伝』には、ともにこの説は見えない。あるいは、他にもとづく所があるのか。
- (9) 唐蘭『中国文字学』(上海古籍出版社、一九七九年、第七一頁)を参照。
- (10) 『説文』の「王」字の積義。
- (11) 『雲南少数民族哲学社会思想資料選輯(第二輯)』(中国哲学史学会雲南省分会、一九八二年、第一〇三、九一〇頁)を参照。
- (12) 『難神滅論』序(『弘明集』卷九)参照。
- (13) 『淮海集』卷三『紀夢答劉全美』参照。
- (14) 錢鍾書『管錐編』第二冊(中華書局、一九七九年、第四九五―四九六頁)参照。
- (15) 『精神分析引論』(商務印書館、一九八四年、第一一三頁)を参照。

補注

- (1) 『国語』晋語。
- (2) 『春秋左氏伝』昭公七年。
- (3) 『論衡』紀妖篇。
- (4) 『玉台新詠』卷一、『樂府詩集』卷三七等所収「隴西行」(別名「步出夏門行」)。
- (5) 『後漢書』五行志五の注に引く応劭の語。
- (6) 『漢武帝内伝』には「景帝夢神女捧日以授王夫人、夫人吞之。十四月而生武帝」とある。
- (7) 馬融の夢は『独異志』に引く『武陵記』に、王洵、李白、王勃の夢は『夢占逸旨』(筆墨篇)に所載。
- (8) 『三国志』卷二九周宣伝。
- (9) 同注〔8〕。
- (10) 『太平広記』卷二七九崔湜の条に引く『朝野僉載』を参照。
- (11) 『晋書』卷一〇三劉曜伝。
- (12) 『太平御覧』卷三九七に引く『帝王世紀』を参照。

- [13] 『三国志』卷四一楊洪伝の注に引く『益部耆旧伝雜記』には、何祗が見た夢を趙直が占い、「桑字四十下八、君寿恐不過此」と解いたところ、果して何祗が四十八歳で卒した記事を引く。「桑」「喪」とが同音による夢解きの例に、『太平広記』卷二七六に引く『異苑』の王戎の夢がある。
- [14] 『晋書』卷九五索統伝。
- [15] 焦循『春秋左伝補疏』に『黄帝内経素問』五藏別論および解精微論を引いて述べた語。
- [16] それぞれ、『春秋左氏伝』昭公三十一年、成公十年の記事。
- [17] 『春秋左氏伝』成公十七年の杜預の注。
- [18] 『三国志』卷四〇魏延伝。
- [19] 同注〔8〕。
- [20] 『洛陽伽藍記』卷二に「元慎解夢、義出万途、随意会情、皆有神驗」とある。
- [21] 同注〔8〕。

(立命館大學文學部非常勤講師)

